

地震で行方不明になったペットの捜索

ミッシング・ペット・パートナーシップ (www.missingpetpartnership.org)

キャット・アルブレヒト、ジム・ブランソン(共著) 渋谷薫(訳)

© 2010 Missing Pet Partnership (この記事は著者の許可を得て転載しています)

地震や余震が発生すると、犬や猫も大変怖い思いをします。パニックになって「闘争か逃走か (fight or flight)」という心理状態に陥ると、一般的に犬は逃げ、猫は静かに隠れてしまう傾向にあります。犬と猫の違い、そして災害に遭って行方不明になってしまったペットをどう探すべきかをお話しましょう。

パニック状態の猫

パニック状態の猫は、犬とはまったく違った行動をとります。猫はなわばり意識が強く、パニック状態になるとすぐに隠れてしまいます。静かに隠れるということが、危険から身を守る唯一の方法だからです。恐怖のあまりあわてて勢いよく逃走し、知らない場所(今まで行ったことがない、数軒先の家など)で迷子になってしまうこともあります。基本的には自分のなわばり内で隠れていることがほとんどです。竜巻やハリケーンなどで家が倒壊してしまっても、数日、数週間と途中で生き延びていたという例もあります。ですから、声が聞こえない、姿が見えないからと言って、地面の揺れや物の落下におびえた猫が静かにかくれている可能性がないわけではありません。動物にやさしい捕獲用のわながある場合は、それを使って猫の捕獲を試みてみましょう。ない場合は、水と少量の餌を所々に置き、どこに猫が隠れているかを辛抱強く調べましょう。迷子になった猫の行動とその捕獲に関する詳細は、ウェブサイト

<http://www.missingpetpartnership.org/recovery-displacedcat.php> (英語)を参照してください。

パニック状態の犬

隠れ場所を探して隠れる犬もいるので、車庫や建物の中、車の下などを必ず確認しましょう。瓦礫の中に閉じ込められてしまう犬もいますが、それは犬がいた建物が崩れてしまった場合がほとんどです。庭にいた場合や建物から逃げることができた場合は、犬はたいてい逃走してしまい、家から遠く離れた場所で見つかったりすることがあります。あまりの恐怖に飼い主にさえ近づこうとしない犬も珍しくありません。しばらくして落ち着きを取り戻し、人に近寄ってくる犬もいますが、いつまでも逃げ続ける犬もいます。犬を直視して名前を呼び、犬に近づいて行く人がよくいますが、「闘争か逃走か」というモードになっている犬に対して、実はこれはとても威嚇的な行為なのです。

パニック状態の犬の名前を呼ばない

迷い犬やパニック状態の犬の名前を呼ぶことは、一番やってはいけない行為です。すでに何人もの人が捕獲を試みた後では、名前を呼ばれた犬はそれが例え飼い主であっても怖がって反射的に逃げてしまうからです。名前を呼ぶ代わりに、咳払いをしたりクシャミの真似をしたりして、自分の存在を犬に知らせしてから、顔をそむけましょう。顔をそむけることは服従の動作です。また、地面に落ちている食べ物を食べているふりをする 것도効果的です。ソーセージやレバーのおやつなど、においの強い食べ物を袋に入れて持ち歩くことをお勧めします。地面に座ったり、仰向けで寝転がって胸をぽんぽんとたたいてもいいでしょう。とにかく、犬を直視してまっすぐ歩み寄ることは避けてください。名前を呼ばれて

も逃げ続けていた小さなテリアが、ボランティアがあお向けに寝転がって胸をぼんぼんとたたいたら尻尾を振って寄ってきたことがありました。また、パニックになった犬から見える場所でボランティアと飼い主が犬を完全に無視してフリスビーを投げあい、捕獲に至った例もあります。「闘争か逃走か」モードになっている犬に注意のすべてを注ぐと、捕獲に対する恐怖感をさらにあおってしまい、逆効果です。犬の注意を引いたら、食べ物などを使っておびき寄せましょう。

完全な「闘争か逃走か」モードに入ってアドレナリンを過剰に分泌している犬は、嗅覚をつかさどる脳の部位をシャットダウンしてしまうことがあります。パニック状態の犬にソーセージを与えても食べないことがあるのはそのためです。ですから食べ物を使った作戦はうまくいくこともありますが、その犬自身またはその犬のパニックの度合いによっては失敗することもあります。また、匂いで飼い主を瞬時に認識する犬もいれば、そうでない犬もいます。「パニック状態の犬の名前を呼ばない」ことに関する詳細はこちらのブログ <http://katalbrecht.com/blog/?p=424> (英語) に書いています。

ポスター、カメラ、捕獲用のわな

ミッシング・ペット・パートナーシップでは、最も効果的な道具の一つとして大きな蛍光色のポスター(貼り紙)の作成を勧めています。誰かがあなたの犬を見かけたと電話をくれたら、すぐその場所に行って犬を探します。そのすぐ周辺に犬がいなくても、茂みや犬が戻ってきそうな場所が近くにあれば、そこに水を入れたバケツと食べ物を入れた容器(リードとともに車に常に常備)を置きます。また飼い主あるいはその犬自身の匂いのついた毛布やタオル(顔や体にこすりつけるだけで匂いはつきます)を置いてもよいでしょう。野生動物の観察用のデジタルカメラがあれば、それを餌の近くに設置します。次の日に食べ物がなくなっていた場合、食べたのが野生動物だったのかあなたの犬だったのかが分かります。その後は、そこに張り込むか、動物にやさしい捕獲用のわなを設置します。昨年、パニックになった犬オットーを野生動物観察用のカメラと捕獲用のわなを使って捕まえたときの様子をこちらのブログ

<http://katalbrecht.com/blog/?p=132> (英語) に書いています。

“マグネット・ドッグ”

2008年、ミッシング・ペット・パートナーシップはバーニーズ・マウンテン・ドッグのソフィーを7週間かけて捕獲しました。そのときの様子をウェブサイト <http://www.missingpetpartnership.org/seattlepethunters-sophie.php> (英語) に書いています。捕獲しようとしている犬と仲の良い犬がいる場合、その犬に長めのリードをつけて同行させましょう。機嫌のいい仲良し犬を使ってパニック状態の迷い犬をおびき寄せ、捕獲に成功することがよくあります。この「マグネット・ドッグ(磁石のように相手をひきつける犬、という意味)」テクニックと「スナッピー・スネア」と呼ばれる特殊な捕獲道具を使った捕獲も、たいへん効果的な方法の一つです。マグネット・ドッグとスナッピー・スネアを使ってモモという犬を捕獲したときの様子はこちらのブログ <http://katalbrecht.com/blog/?p=376> (英語) でお読みください。これらのケースを読んで、パニック状態の犬の行動をよく研究されることを強くお勧めします。

張り紙、ポスター

周辺の住民やレスキュー隊の人々にペットが行方不明になっていることを知らせることは大変重要です。ミッシング・ペット・パートナーのウェブサイトには、大きな蛍光色の「犬(猫)を探しています・報酬あり」のポスターの作成方法が載

っています。特大サイズの蛍光色のポスター紙を使うことにより、通常の大さの貼り紙には気がつかない人の注意も引くことができるのです。私たちのウェブサイト <http://www.missingpetpartnership.org/recovery-posters.php> (英語)には、ペットの発見率を確実に上げるポスターの作成方法と写真が載っています。ぜひ参考にしてください。場合によっては、人通りの多い交差点でこの蛍光色のポスターを持って立つことにより、通行人の注意を引き、ペットが行方不明であるということを多くの人に知ってもらうこともできます。「交差点アラート」と呼ばれるこのテクニックの説明はウェブサイト <http://www.missingpetpartnership.org/recovery-intersection.php> (英語)を、迷い犬タブの話は私のブログ <http://katalbrecht.com/blog/?p=208> (英語)をお読みください。

地震後に犬や猫を探すことの難しさは、捜査中に受けられる手助け、そして使用できる道具によって最終的に決まります。しかし、一番大事な道具は、希望と前向きな姿勢です。あなたのペットはどこかにいるのですから、迷い犬や迷い猫の行動パターンおよび捜索方法を正しく理解していれば、無事に家に連れ戻す確率も上がります。

著者**キャット・アルブレヒト**さんは、迷い犬・猫に関する書籍を二冊執筆されている世界的に有名な執筆家です。日本の皆さんとそのペットたちの助けになるようにと、ご自身の豊かな経験に基づいて書かれたこの記事の転載を快く快諾してくださいました。心より感謝いたします。

アルブレヒトさんは米国を拠点とした非営利団体**ミッシング・ペット・パートナーシップ**の創設者です。以前は警察官として、また警察犬のトレーナーとして活躍しておられました。現在では「ペット探偵」として、警察官のテクニックとテクノロジーを使い、行方不明になったペットの捜索に尽力されています。また、捜査犬のトレーニングおよびペット探偵の育成も手がけ、MAR (Missing Animal Response Technicians) トレーニングのパイオニア的存在となっています。